ホームスティで国際交流の輪

地域ぐるみ・家族ぐるみ 清水市三保

地域で積極的に海外の人々のホームスティを受け入れている清水市三保を訪れ、高木好己さん(三保をよくする会会長)、鉄日出さん(三保国際交流会副会長、三保婦人会長)と主婦の竹下美智子さん、土屋由紀子さんにお話を伺いました。

◇カナダ・アメリカに移住の歴史

清水市三保は人口一万四千人余りの、工業・観光・農業・漁業・文教地区の混在地帯です。三保地区は、明治・大正時代からカナダやアメリカに移住する人が多かったそうです。「三保は砂地のため農業が難かしく、生活には厳しい背景があったのです。」と、高木さんは話されました。

◇留学生のホームスティを

三保地区が留学生のホームスティを受け入れたのは、昭和五十七年に、静岡大学の先生が「留学生にキャンパスの中だけでなく、地域との交流を。」と、高木さんに話されたことがきっかけとなり、静岡大学と東海大学の留学生と、地域の人々とのホームスティを通しての交流が生まれました。

そして、同じ頃当時の小学校役員のお母さん方が母体となって、「三保をよくする会」の中に「国際交流会」が設けられ、留学生のホームスティ受け入れの中心となってきました。現在会員は四十名位ですが、子供の受験などでホームスティを受け入れられるのは十名位とのことです。

国際交流会は、「夏祭」「子供の日」「セカンド・スクール」や三保神社の祭などの折留学生との交歓会を開くなど、ホームスティ以外の交流も盛んです。特に、セカンド・スクールでは、小学生が留学生と共に三泊四日の合宿生活をすることによって、子供の頃から国際性を身につけて欲しいとの地域の人々の願いがこめられています。

◇竹下さんのお宅では

「中学生の二人の息子が留学生を大歓迎しており、親には話さないことを話したり、又聞いてもらったり、英語、数学などを教えてもらったこともあります。」

「最初主人が乗り気で、私は尻ごみしたのですが、三回目からはかまえないで留学生と接することができました。」と、今では余裕をもって話される竹下さん。

「中国からの留学生は、日本語の勉強を十分してくるので言葉の障害も少ないですよ。暇になるといつも読書をしていて、今の日本人が忘れかけているものを持っています。」と、子供にもいい影響を与えていることを話されました。

「留学生の皆さんは故国を離れて寂しいが、日本文化を知るために家庭を訪問するのですから、普通に接して、決してかまえてほしくないのです。」と強調されました。

◇土屋さんのお宅では

土屋さんは小学校の役員をしていた四年前から引き受けられ、二人の娘さんはもちろんのこと、おじいさん、おばあさんとも馴染んで家族ぐるみの交流を深めています。

「刺身などの生ものも何回か出しているうちに食べられるようになりました。あまり先入観にとらわれずに、同じように扱ってあげることが大切ですよ。一緒に料理したり、手伝ってもらったり、自分の子供に接するように振る舞えばいいことですよ。」など、自分の経験から得たホームスティを受け入れる時のコツを教えていただきました。

去年の八月、土屋さん夫妻がタイを訪れた時、以前めんどうをみられた留学生が空港まで出迎え、一週間案内をしてくれたと、うれしそうに話されました。

◇ベテランの鉄さんのお宅では

鉄さんは、子供さんが小さい頃外国の船員さんを預かった経験があり、「ホームスティの受け入れはスムーズでした。」と余裕が感じられました。

「外国語は話せないので、日本語を覚えてもらうようにしています。婦人会の仕事などで忙しい時は、明日のスケジュールと夕飯の希望を聞くだけです。あとは干渉せずに、おかまいなしです。」「はしを使って、おふとんで寝て、ゆかたを用意して、朝食もごはんにみそ汁で、私たちと変わらないですよ。」と、鉄さんはホームスティを本当に自分のものとされているようです。

◇すべての国の人々との交流を

昭和五十八年からフランスの海溝調査船が三年続けて清水に入港しました。この時、研究者たちのホームスティを地域で受け入れて大変喜ばれ、民間交流の大役を果たしました。又、六十年にはアメリカの高校生たちが海洋研修に訪れ、地域の人々と交流を深めました。

◇今後のホームスティ活動は

宿舎、食事、配車、通訳など、それぞれの家庭の実情に合わせた受け入れ方法、役割分担によって無理のない交流が望まれます。一応の子育てを終った気配り十分の主婦層の活躍が期待されます。

これからみんなでホームスティ活動を中心に国際交流を一層盛り上げていきたいと、熱っぽく話してくれました。

◇婦人の手で国際交流を

三保の国際交流は、人間と人間のつきあいをごく自然に求めています。留学生も親戚にでもいくような気がるさで訪問してくれます。留学生と地域社会との交流は、三保で大きな成果をおさめています。

三保のホームスティの主役は婦人たちです。婦人の手づくりのボランティア。こうした草の根国際交流の誇りと、留学生に夢を託している主婦三人の笑顔が印象的でした。

（編集員　田口和子）

生き生きとさわやかに21世紀へ

── 話してみませんか 国際化時代 ── シンポジウム

と　き　昭和61年11月26日(木)　13:30～15:30
ところ　沼津市民文化センター
主　催　第４回静岡県家庭婦人海外派遣団

「生き生きとさわやかに二十一世紀へ」の共通テーマの下、第四回家庭婦人海外派遣団員による第三回自主公開講座「話してみませんか国際化時代」が開かれました。

美尾浩子静岡女子大学教授の「国際交流は異文化間のコミニュケーションの確立であり、ゆるやかなかかわりの中で相手を理解し、自分を伝えるという相互理解の上に成り立つ。多様な文化との触れ合いで人間として高められる」とその意義を分り易く説く、フラッシュスピーチで始まり、金子みどりさん、デルミン・ケルステンさん、小松幸子さんがご自身の体験をふまえ、国際交流の大切さを語り活発な意見交換が続きました。

熱気あふれる会場には海外派遣の思い出のパネルが飾られ、彩りを添えておりました。

（編集員　田口和子）

婦人と国際交流

国際交流と国際理解

現在、この地球上には、四十億以上の人々が百数十の国に分れ、それぞれ異なった文化や習慣を持って生活しています。最近の急速な貿易の拡大及び交通機関の発達は、世界を一つにしました。しかし、一方ではお互いの理解不足による様々な摩擦や問題も表面化しており、国際交流の重要性が一層高まっています。

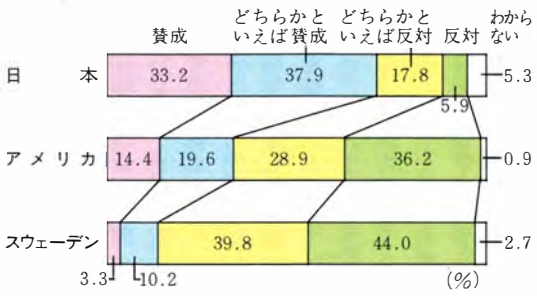
国際交流にとって大事なことはお互いが相手を理解しようと努力することだと思います。そして、その近道の一つは、お互いの家庭生活を知ることではないでしょうか。家庭生活はその地域の風土や文化に根ざしており、国際理解の宝庫です。婦人がお互いの家庭生活を理解できれば、自国との違いを違いとして理解できます。そうした広い視野に立つ物の見方、考え方を持つことこそ、国際交流に最も必要なことだと思います。

婦人の意識の国際比較

婦人問題は世界共通の問題ですが、各国の婦人の意識には大きな違いがあります。

総理府の57年の調査によれば、日本では男女の役割分業意識がとびぬけて高いことがわかります。

「男は仕事、女は家庭」という考え方について



資料出所：総理府「婦人問題に関する国際比較調査」（昭和57年）

国際化と国民の意識

国際化に対する国民の意識を、経済企画庁の「国民生活選好度調査」（61年）からみると、国民は国際化の進展についてはかなり好意的であり、男女別では男性のほうが女性より好意的です。

自分自身にかかわる意識についてみると、外国で生活することに対する抵抗感は非常に強く、又、「外国人との結婚」は66・8％、「外国人留学生を下宿させる」ことについては50・1％が抵抗を感じるとしており、外国人と一緒に暮らすことに対する抵抗感も強い。こうした抵抗感は「外国人に日本人同士と同様の親しみが持てる」と思っている人では少数になっており、日常外国人と接触が少ないことが抵抗感を強めていると考えられます。

男女別にみると女性の抵抗感が強い。これは特に主婦の場合、外国人との接触が少ないためであろう。また、「外国人留学生を下宿させる」については、30歳代の女性の抵抗感が強く、50歳代の女性のほうが低い。30歳代は子育てで最も忙しい時期にあたり、50歳代の女性は子育ても一応終わり、子供も結婚して自立していく世代にあたることから、このような結果になっているものと思われます。

婦人海外派遣事業

県では、昭和53年から隔年で海外での家庭滞在や各施設の視察及び一般市民との交流を通して国際的視野にたった婦人を養成するため、婦人を海外へ派遣しています。こうして海外で研修を受けた百余名の婦人は、その成果を広く地域に還元し、活力ある地域づくりに反映するとともに、地域における国際理解の推進に大きな成果を上げています。

昨年三月に策定された「婦人のための静岡県計画」においても、「国際協力の推進」が主要施策とされ、「国際交流への参加の促進」「国際理解の推進」「国際協力活動への参加」を大きな柱として積極的な推進を図ることとしています。又、この一月に決定され、今後十年間の県政の基本となる「静岡県新総合計画」においても、国際交流の促進を五つの柱のひとつとして掲げ、世界に開かれた県づくりを進めることにしています。

これからの国際交流

経済大国となった我が国は、今後国際社会の一員として、政治、経済、文化等において大きな役割と責任を担っていかなければなりません。現在あらゆるレベルで国際交流が活発に行なわれており、留学生や研究者の交流、海外における日本語学習者の急増などその成果が除々に上っています。しかし、私たちは海外の人々を充分理解し、又、海外の人々が私たちを充分理解していると言えるでしょうか。今後一層人と人との心の国際交流が求められます。一人一人の婦人の力は弱くても、その地道な草の根国際交流は、これからの国際交流のひとつの方向を示していると思います。

「静岡県婦人大会」 開かれる！

― 婦人の連帯で活力ある社会を ―

と　き　　昭和61年11月7日㈮　10:30～15:00
ところ　　焼津市文化センター　大ホール
主　催　　静岡県・静岡県婦人団体代表者連絡会議

大会スローガン

1．男女共同を目指す社会にあって
　　自らの生き方を確立しよう。
2．団体相互の理解を深め、
　　活動の輪を広げよう。
3．「婦人のための静岡県計画」を
　　実効あるものにしよう。

★講　演

「文学の中の女性」

作家　小川国夫

今年の講演は、藤枝市在住の作家小川国夫さんの「文学の中の女性」でした。

小川さんは、「逸民」「アポロンの島」「青銅時代」などの作品があり、純文学界の第一人者と言われています。

小川さんは最初に焼津にちなんだ思い出を語り、その後で小川女性論を展開されました。謡曲に例をとり、「女性は満身これ毒、蛇のごとし」とか、「女性は菩薩である」という話を持ち出し、女性の心を文学者の立場から話されました。

文学という世界から、女性をそして自分を見直すことも必要ではないだろうかと感じました。

★団体発表

「婦人のための静岡県計画への取り組み」

静岡県婦人協会など30の団体、グループが、「婦人のための静岡県計画」の取り組みについて発表しました。各団体は規模や目的はそれぞれ異なりますが、日常の活動に懸命に取り組んでいることに感心させられました。婦人活動がこうした多くの団体の地道な活動に支えられ、そしてこの積重ねがこれから大きな成果を生み出すことと信じています。

★まとめと提言（要旨）

「婦人のための静岡県計画を実効あるものに」

全国婦人問題企画推進有識者会議委員　芦川　緑

各団体の発表を聞いて、静岡の女性が多彩な活動をしており、しかも着実に前進していることに感動しました。

この十年間に男女平等についての諸法制の基本的な枠組が整備されましたが、実際上の地位向上をはかるためには、継続的な努力をそれぞれの団体や個人が行っていかなければならないと思います。

静岡県の婦人も今こそ命を燃やして頑張る時が来ました。それには核となる婦人協会にみんなが加盟し、静岡県中の婦人がひとつの輪となり、大きく手をつないだ時初めて婦人のための静岡県計画も実効あるものになると思います。

――取材して――

一、三〇〇人の婦人達が一堂に会したとは思えないほど静寂で緊張感が漲っていました。各団体の発表には頼もしさを感じました。

婦人の社会的地位を向上させるためには、〝発言する勇気〟と〝発言する場〟を持てるよう努力することが今後の課題であると思いました。

（編集員　太田美恵子）

はじめまして

←イキイキ インタビュー→

小学生向きの児童図書や、遠州地方を紹介する本を出版している「ひくまの出版」。その女性経営者、那須田敏子さんに、本作りのお話しをうかがいました。御主人は児童文学者の那須田稔さんです。

◆初めに「ひくまの出版」を御紹介下さい。

私達は二人とも浜松出身ですが、それまで住んでいた鎌倉から浜松に帰って来たのが、昭和五十年です。主人の仕事を手伝いながら感じたことは、浜松に出版社があってもいいではないかということでした。また、改めて自分達の住む浜松の良さを再認識するうちに、郷土を紹介する本を作りたいと思いました。

そうして、五十三年に「ひくまの出版」を設立し、写真と紀行文による「シリーズ遠州」が最初の出版となりました。現在も、児童図書と郷土紹介の本を中心に、年間十二～十五冊の本を出版しています。スタッフは、三十代、四十代を中心とした七人です。

◆地方にある出版社の中でも、ユニークな存在とお聞きしますが。

事務所は、浜名湖のほとりという、大変恵まれた環境にあります。出版社はどこでもできる、というのが私達の考えです。事実、現在、地方の出版社として、全国的な販売網を持って活動しています。日本の全般的な東京中心主義の傾向からすれば、珍らしい存在ではないでしょうか。

小さな出版社であっても、地方に根をおろしながら、全国に向ってメッセージを送る事はできると思います。そうする事が、地方の文化を育てて行くのだと思います。

那須田　敏子

㈱ひくまの出版社長

◆海外との交流も広がっているということですが。

昨年は、西ドイツのミュンヘンで、児童図書の原画展を開くことができました。また、中国の児童文学者金近（きんきん）さんと、日中合作の絵本第一号「ぼくのチビッコガチョウ」を発刊することができました。両方とも、長年暖めてきた企画ですので、実現できた事、非常に喜んでいます。海外への交流の輪は、今後ともどんどん広げて行きたいものです。

◆女性の経営者という事を、どのようにお考えでしょうか。

女性である私が社長となった特別な理由はありません。経営者といっても、編集もやりますし、一年中、夜昼なしの忙しさです。

児童図書の場合、それを購入し、子供に読ませるのは母親です。その点、女性の経営者の方が、母親の立場もわかり、都合のいい面もあります。

◆御自身も、創作活動をされているそうですが、今後の抱負は？

私自身も「西野綾子」のペンネームで、「小さな赤いてぶくろ」という小学生向きの本を五十八年に出しています。この絵本は、三月に東映でアニメ化されます。

一冊の本との出会いが、人の人生を変える事があります。これからも、よりよい本を子供達の所に届けたいと思っています。

御主人の那須田稔さんも加わってくださり、本作りの話しは、はずむばかりでした。お互いの能力と人格を尊重しつつ、協力し合う那須田さん御夫婦。これからも心暖まる本を、たくさん作られる事を期待しております。

インタビュアー・大山幸子

名　称　株式会社ひくまの出版
所在地　浜名郡舞阪町舞阪三三三ノ一

清水市にある住まいづくり研究所は、白くてかわいいミニハウスという感じでした。一級建築士で数々の建築を手がけておられ、女性の方が、こだわりなく入ることのできる研究所を開設された望月美佐枝さんを、お訪ねしました。

♥建築士になろうとされた動機は？。

手に職をつけたいと思いましたね。建築家は、男性でなければなれないものだと思っていましたが、高校の時、雑誌で女性でもできることを知り、家業も建築の仕事ですし、身近にも建築家が多いということで、その方面の大学を選びました。

♥六年前に作られた〝女性のための住まいづくりサークル〟ではどんなことを？

発足当時は、主婦の方達も入って住宅（インテリアなど）について、毎回テーマを決めて勉強会をやりました。今は、女性でなければ考えられないような、女性の感性を活かせるような住まい作りを求めて、家具屋さん、建築仲間、インテリア関係者などすべて女性だけでグループ活動をしています。今年は何をやろうかなんて相談したり、情報交換をしたりしています。

一昨年の四月に、「住まいを考える展」を西友清水店で開催しました。

望月　美佐枝

住まいづくり研究所所長

♥一昨年、住まいづくり研究所を設立されたようですが、どのような方が利用されていますか。

主に家庭の主婦ですね。一年間に手がけた仕事は十軒ぐらいです。子供部屋や台所の増改築などの相談も多く、皆さん気軽に入ってきてくれますよ。台所を使う主婦の立場にたって相談にのっています。

♥清水市の活性化を働きかける〝ふるさと清水を考える会〟にも入ってご活躍されているようですが。

建設省の町づくり講座が一年間ありましたが、その時のメンバーが残り、会ができました。商工会の方や、市職員、設計事務所の方などですが、十一人中女性は私一人なんですよ。昨年七月には、清水市の行事である灯籠流しの時、実行委員会を作り、巴川でフルートやギターなどによる水上コンサートを、ヌ岸辺では琴の演奏会を開きました。

今ある巴川を生かしながら、清水の活性化を考えていきたいですね。

♥これからどのような街になってほしいと思いますか。

街がきれいになってほしいし、おもしろい街になってもらいたいです。例えば、つっかけで潤歩できる所もあれば、思いっきりおしれやして行ける所もあったらなあと思います。

又、せっかくの港があるのですから、これをもっと活かしてほしいですね。今のままでは、中心となる核が無いのでもっと夢をほしいです。

白い研究所の中には、台所セットとワープロと製図台が目だちました。数少ない女性の一級建築士として、いろいろな角度から住まいを見つめ、また地域の活性化のために、明るくさわやかに活躍されている望月さんは、お若い素敵な女性でした。

インタビュアー・宮村清子

名　称　住まいづくり研究所
所在地　清水市大手一丁目二―十一